新型コロナワクチン接種でギラン・バレー症候群のリスクは高まらない　英研究

2022/5/14 毎日新聞

3回目の新型コロナワクチンの接種を受ける人＝津市で2022年2月6日、寺原多恵子撮影

新型コロナウイルスワクチンを接種しても、ギラン・バレー症候群などの神経疾患のリスクは高まらない、という研究結果が英オックスフォード大学 Nuffield Department of Orthopaedics, Rheumatology and Musculoskeletal Sciences の Daniel Prieto-Alhambra 氏らによって報告された。同ワクチンの安全性をより強固にする成果で、詳細は「The BMJ」に3月16日掲載された。

英アストラゼネカ社製、米ファイザー社製の新型コロナワクチン接種後に末梢神経障害であるギラン・バレー症候群の発症が報告されたことを受け、欧州医薬品庁（EMA）は、これらのワクチンのまれな副作用にギラン・バレー症候群を含めた。しかし、現時点では、新型コロナワクチン接種後のギラン・バレー症候群やその他の免疫介在性神経疾患の発症リスクに関する統一見解は得られていない。

Prieto-Alhambra 氏らは、英国とスペインのプライマリケア診療の記録を用いて、新型コロナワクチンの接種、コロナウイルス感染症罹患、免疫介在性神経疾患の発症との関連を検討した。対象者は、アストラゼネカ社製、ファイザー社製、米モデルナ社製、または米ジョンソン・エンド・ジョンソン社製のいずれかの新型コロナワクチンを1回以上接種した833万497人と、RT-PCR検査で新型コロナウイルス陽性の判定を初めて受けた新型コロナワクチン未接種者73万5870人。対象とする免疫介在性神経疾患は、ベル麻痺（顔面神経麻痺の一種）、脳脊髄炎、ギラン・バレー症候群、横断性脊髄炎の4種類とした。また一般集団からも1433万80人を選び出し、コロナウイルス感染症パンデミック以前のこれらの神経疾患の自然発生率を推定した。免疫介在性神経疾患の罹患率は、新型コロナワクチンの1回目接種後21日時点、新型コロナウイルス陽性の判定後90日時点で、一般集団での自然発生率は2017～19年の期間で推定した。

コロナ感染と神経疾患リスク増との間には関連性

その結果、ワクチン接種後の罹患率は、ベル麻痺、脳脊髄炎、およびギラン・バレー症候群については、一般集団での自然発生率と一致することが明らかになった。横断性脊髄炎については、ワクチン接種者全体での発生件数が 5 件を下回っていたため、解析できなかった。しかし、コロナウイルス感染症罹患後では、ベル麻痺、脳脊髄炎、およびギラン・バレー症候群の罹患率は、研究チームが想定していたよりも高かった。英国のデータに基づくと、コロナウイルス感染症患者での標準化罹患比は、ベル麻痺で 1.33（95%信頼区間 1.02～1.74）、脳脊髄炎で 6.89（同 3.82～12.44）、ギラン・バレー症候群で 3.53（同 1.83～6.77）だった。

この結果を受け、Prieto-Alhambra 氏は「今回対象とした 4 種類の免疫介在性神経疾患については、新型コロナワクチン接種後にその発症リスクが高まり得るという危険信号は確認されなかった。しかし、新型コロナウイルスへの感染と、ベル麻痺、脳脊髄炎、およびギラン・バレー症候群のリスク増加との間には関連が認められた」と結論付けている。その上で、「神経学的障害を引き起こす原因を特定するのは無理かもしれないが、新型コロナワクチンの接種がその原因である可能性はほぼないといっても過言ではない」との見方を示している。（HealthDay News 2022 年 3 月 17 日）